

## 東北の農山漁村の未来づくりに寄せて―風と土の生き方と希望―

庄内平野から見える鳥海山も本格的な色づきを始め秋の深まりを感じさせる季節となった。筆者はこの度故あって山形を離れることになった。筆者が東北地方に来て早いもので14年の歳月が流れようとしている。山形に住まいするようになってからは8年となるので、20代のほとんどを農山村で暮らしたということになる。振り返ってみて人生のこの時期にこの地から学んだことの大きさをかみしめている。

筆者が東北で驚かされたのは、特に農林漁業の現場における「本物」の知恵と技術をもつ人々との出会いであった。山の動植物の細かい表情まで見分けその恵みを生かすまたぎのおじさんたち、いつどのような魚が遡上するか知悉し川の流れを的確に読む川漁師さんたち、天候を見極め土のにおいを感じながら安定した作物作りをこなしていく農家の皆さん、そして与えられた風土の恵みを最大限生かし日々おいしいものをこしらえてくれるおばさん達との出会いがあった。こうした出会いは、それまでいわばバーチャルな知と技術の中で育ち考えることに慣れてきた筆者に大きな影響をもたらし、地に根ざした生きる力に感銘を受けた。

一方で、地元のせっかくの力が、地元では気がつかず埋もれさせてしまっている現状を目の当たりにした。井の中の蛙的な発想で真の力を発揮させることなくつまらないものとしてしまうのを垣間見たのである。村人の「何にもないムラ」という語り口調にそれが表れている。誇りを失い過疎化や限界集落という厳しい現実と直面する農山漁村の現状があった。

こうした現状をばねに地元住民とヨソモンと一緒に地域を見つめ共にその良さを再発見しながら自らの力で取り組んでいくムラづくりの試みが始まった。「地元学」というテーマで、幾度か本誌で触れさせていただいたとおりである。そして筆者はムラの学びを地域を超えて展開することの可能性について真剣に考えることになった。地元とヨソモンがつながり協働することで、一つの小さな山村や農村、あるいは漁村が、地域エゴではない普遍的な価値と大きな希望を生む主体となりうるということがわかったからである。

ごく一般的に流布している説に、東北の農山漁村は昔は閉ざされていて自給自足の暮らしだったというものがある。だが本当にそんなことがあったのだろうか。筆者の東北での生活の後半は山形県の各地を旅する活動となった。この活動の中で、各地の古老達が、平野と山麓の農業を軸とした労働や人材の交流について、あるいは海辺の人々と山間地域の人々との物々交換について、あるいは遠い都市部の消費者と自分たちの里山の炭焼きの関係について、生き生きとその思い出を語る姿にしばしば出くわした。

東北の、いや日本の農山漁村は、その風土を舞台にして様々な人々が交差し学びその地の文化を育み熟成させ、その時代時代の苦悩を乗り越えて、新たなそして確かな希望と生き方を創出してきたのではないだろうか。筆者の郷里、長野県で農村の地域づくりに尽力された玉井袈裟男先生の風土舎宣言の言葉の数々を思い出す。「風は、遠くから理想を含ん

でやってくるもの。土は、そこにあって生命を生み出し育むもの。君、風性の人ならば、土を求めて吹く風になれ。君、土性の人ならば、風を呼びこむ土になれ。土は、風の軽さを嗤い、風は、土の重さを蔑む。愚かなことだ。」「風は、軽く、涼やかに。土は、重く、暖かく。和して文化を生むものを。」(風土舎宣言より抜粋)